

説苑



内務技監の今昔 (一)

清水生

古市公威氏

筆者は拙文以て本誌毎號に連載中であつた、歴代内務土木局長と其の時代」も回を重ねること漸く十五回となつたので、前號にも豫告したやうに、本題は亦他日に譲つて本誌からは内務技監の方面に秃筆を向けることにした、夫れは度々書いたことでもあるから今更こと新しく言ふまでもないが……元來何れの國家に於ても一國の興廢はその國の土木政策……土木事業換言すれば河川治水港灣道路等々の修築改善等に於て其の政策と技術とが渾然一致して、そ

の宜しきを得ないならば國家の土木行政は完全に遂行出來ないのみならずこれがために國家は産業に經濟に其他凡ゆる部門に於て發展を期することは望めないことは茲に識者を俟ずして明白のことである。さればこれが行政の府たる内務省に於て技術部の棟梁たる人物を捉へ來つて其の當時と今日とを比較し更に藝に連載したる歴代土木局長と其の時代とを併せて見れば我國の土木行政と土木の發達の徑路等は略ぼ判明すると共にその時代々々に其の衝に當つたる人物の一端をも窺うことが亦多少なりと興味を引くに足る

と思ふのである。勿論斷つて置くが本稿は我國の土木史といふのでもなければ亦土木政策やその他の發展史ともいふべきものではない。只だ單にその當時々々の狀況とその衝に當つたる人物の概評とも云ふべき一種の隨筆に過ぎないのである、これは諒とせられたい。

偕て明治二十七年に勅令第六十六號を以て初めて内務省に土木技監といふ職を置いたのである。そうしてこの官制に依つて最初の技監になつたのは、故男爵古市公威氏である。氏は明治二十七年六月廿二日に技監に就任して明治三十一年五月十日まで約四ヶ年間程技監の職にあつた。勿論氏はその以前明治二十三年五月十七日に内務省初代の土木局長に就任して技監になるまでズツと土木局長の椅子に居つたが、局長の方は都筑馨六氏に譲つて専ら技術方面に専心するために技監になつたのである。古市氏のことについて は曩に稍や詳しく書いたから「本誌第二十二卷第三號参照」こゝで再び書くのは重複するの嫌もあるから單に氏が技監當時のことを書いて置くことにする。

元來古市氏は我國工業界の最大權威者として最高の技術家たるの力量を以てゐたが、亦他方行政官として將た亦政治的手腕を多分に持つてゐて、行績も内務遞信の兩省及び朝鮮統監府に亘つて相當の効果を擧げてゐる、殊に氏は内務技監在職中には明治初期以來河川港灣の修築及び設計監督等のことを外人の手に委ねてあつたのを我國の人々の手に移し、之れが統率の任に自から當つて其の宜しきを得て以來順調に進んでゐる。殊に治水工事に在つては高水除害の方針を確立して信濃、木曾、淀、筑後等の諸川に着手してゐる。其他の工事に在つては横濱大阪小樽等の重要港の修築及び東京大阪兩市の水道等を起工し、更に全國重要な河川港灣に對して根本的の調査測量を行ひ、改修の範圍及び順序を定むるの基本を作つてゐる。これ等は主として氏の技監當時になしたことであるが、行政方面にも亦相當見るべきものがある。即ち氏が土木局長時代に例へば河川法砂防法等の制定、土木監督官制の改正、復舊改良費國庫補助の途を講じたるが如き夫れである。何れも曩に詳細

に書いたから初代の技監であつた故古市男のことは此位にして次の技監であつた沖野忠雄博士に移ることにする。

沖野忠雄氏



明治三十五年頃の撮影

故古市公

威氏が内務技監の職をやめてその後二代目の技監となつたのは故

名を松之助といひ、後ちに尾藤家に入家して尾藤忠雄と改めたが、其後に復籍してゐる。明治三年に新に大學規則が制定された際に當時大學南校といつた學校で佛蘭西語を修習してゐる。

沖野忠雄氏である。氏の技監在任は内務技師から明治四十四年四月であつて辭任したのは大正七年七月であるから沖野氏の技監在職期間は、大體に於て約七箇年の永きに互つてゐる、先づ沖野といふ人はどういふ人かと思ふてその略歴を見てみると。

氏は古市氏と同じく兵庫縣豊岡の出身で故沖野春水といふ人の二男として安政元年一月六日に生れてゐる。幼

茲で一寸餘談ではあるが現在多くの人々には、大學南校といふのは、どういふ學校であつたか克く判明してゐない人もあろうから一筆書き加へて置くが。……明治新政府は人材養成のために初めて直轄せる學校を設置したのは昌平學校、醫學校及び開成所の三校であつた。この三校は何れも獨立してゐたために、従つて相互の聯絡もなく教育上何等の統一するところがなかつたのであつた。これではどうも克く行かんと明治新政府の人々は考へた結果明治二年六月に昌平學校を大學校と改稱して三校一體の中心根幹たらしめたのであつた、そうして従來の漢學以外に神典國典の研究を以て第一要素として皇道を尊び國體の精華を發揚するに努むると共に、更に西洋の格物窮理開化日新の學を併せて講究せしむることにしたのであつた、然して開成醫學

の二校も亦之れに隸屬せしめたので、政府は明治二年七月に官制を改めて教育行政官として大學校別當、大監少監、以下諸官を定めたのであつた。即ちこの大學校は後ちの文部省の前身であつて、大學校別當は後ちの文部大臣に相當するのである。又實際の教授及び監督の任に當る者には、大中少博士及び大中の助教授並に大中少寮長といふのを置いて、夫々其任に當らしめたのであつた、そうして時の民部卿兼大藏卿であつた松平慶永卿が初めて大學校別當となり、待講秋月種樹氏が大監の職に任ぜられたやうな次第であつた。

我國の最高教育の制度は兎も角もかようにして、新政府に依つて一應の整備は出來たのであつたが、開校後間もなく大學校内の皇漢兩派教官の間に制度上の紛議を生じて、相互に其の輕重を争ふて止まない結果を生じたので、政府も止むを得ず當時各藩の代表者を會して要務を議する。當時の輿論表明の機關であつた集議院に下問したのであつた。然るにこれ等各代表者の思想は儒學を從として皇學を

主とする制度を是認するの餘地がなかつたので、茲に於て

由皇學を從として皇學を
主とする制度を是認するの餘地がなかつたので、茲に於て
政府は名實共に大學校の學制改革が必要であるとの確信の下に、明治二年十二月に大學校を大學に開成所を大學南校に、亦醫學校を大學東校と改稱して翌明治三年三月に至つて新に大學規則を制定した

節一翰書に送られし眞田博士より沖野博士

政府は名實共に大學校の學制改革が必要であるとの確信の下に、明治二年十二月に大學校を大學に開成所を大學南校に、亦醫學校を大學東校と改稱して翌明治三年三月に至つて新に大學規則を制定した

試法、學費、學科の六項目になつてゐるが。詳細なことはこゝでは省略することにする。當時の學科は敎科、法科、理科、醫科、文科、の五科目に分ちて從來の皇漢洋の稱呼を廢して其の一を偏重せんやうにしたのであつた。而して沖野氏が在學時代の大學南校は確か現在の湯島聖堂の邊りにあつたやうであるが、その學科は開成所時代と略ぼ同様であつて講習、語學、數學の三科目に分かれてゐたのである。其の語學は英語佛語及び獨語で生徒の等級は初等を最下級として一等に至るまで合計九等になるが、これを正則と變則との二類として共に普通科と専門科の二級に分ちて普通科は初等から五等まで専門科は四等から一等までになつてゐた。更にこれを法理文の三科として普通科を卒業したる者は専門科に入ることを許さるるの規程であつたが沖野氏が貢進生として入學當時は未だ専門科を開く運びに至つてゐなかつた、當時氏と共に佛語を修むるものは一級上には古市公威氏等があり、亦其他にも七十五人程あつたそうである。

偕てこゝでも亦餘談になるかも知れんが、沖野氏も貢進生の一人であつたから、當時大學南校に貢進生といふ言葉を克く聞くから、當時の貢進生といふのはどう云ふものであるかと調べて見ると明治二年七月に太政官は全國各藩に令達して、現在十五萬石以上の大藩は三人五萬石以上の中藩は二人、五萬石以下の小藩は一人を限つて年齢十六歳から二十歳に至るまでの人材を夫々選抜して大學南校に貢進すべき旨を以てしたのである。而してこれと同時に大學南校では、別に貢進生選舉心得といふものを定めて貢進生の在學年限は五年たること、其の學資は各藩の便宜に任ずるけれども一ヶ月金十兩以下たるべからざる旨を發表したのであつた。斯様の次第であつたから、故古市公威男と嘗て陸軍大臣となつた石本新六氏と二人が姫路藩から選抜されて貢進生として大學南校に入學したのであつたが、沖野氏も亦一年遅れて但馬の國豐岡藩の貢進生として選抜されて南校に入つたのである。

明治政府は明治四年七月に一大英斷を以て、廢藩置縣を

斷行したのであつたがこの結果新政府の基礎も愈々強固となつたので従つて各般に互つて舊來の制度を一舉に改廢したのであつた、學制も亦革新せられて、曩に直接學生を教授する教官と教育行政官との衝突を惹起して、松平別當は

遂に其の責を負ふて辭職し政府も止むを得ず閉鎖してあつた大學本校を廢止して同時に文部省を置いたのである。そうして大學南校は大學本校と共に文部省の管轄となつて其の名稱も大學の二字を削つて單に南校東校と唱へて各獨立の學校となつたのである。當時沖野氏の一級上には前記初代の土木局長技監であつた故古市公威男や陸軍中將石本新六男等は共に兵庫縣の出身者として在學してゐたが他藩からの選拔生も沖野氏と前後して多數在學してをつた。即ち後に帝國大學の總長となつた山川健次郎男を始め小村壽太郎、菊地武夫、三浦和夫「後ち鳩山和夫」齋藤修一郎、平井晴次郎、原口要、松井直吉、南部球吾、櫻井省三等等と幾多の人材が何れも在學してをつたのである、當時全國諸藩の選拔貢進生は悉く大學南校に集つまつてゐて、明治

四年正月現在の貢進生名簿に依ると、その數は三百十名にしてその内英語を修むる者二百十九名、佛語を修むる者七十四名、獨逸語を修むる者十七名であつたといふことである。

斯様にして沖野氏は大學南校で貢進生として修習してゐたが、明治八年六月に至つて文部省が優秀なる學徒を選抜して海外に留學せしむることに成り、氏も亦その擧に入つて、政府から佛蘭西に留學を命ぜられたのであつた、そうして氏は佛蘭西に赴き巴里の中央諸藝學校に學んだのである。この中央諸藝學校といふのは聞くところによると今日の單科工科大學と高等工藝學校とを交ぜたやうな學校であるそうである。兎に角氏はこの學校に在學して主として數學、理學、土木學、を研究して明治十一年八月業を了へて、佛國の土木建築工師の免狀を得て更に彼地に於て實地研究の上明治十四年五月歸朝したのである。次いで明治十六年四月に内務省に入つて土木局事務取扱ひとなり翌十七年七月には内務省四等技師となつ

たが更に同十九年五月には三等技師に昇進してゐる、明治二十四年八月に勅令第十三號學位令第三條に依つて工學博士を授與せられると同時に内務省第四區土木監督署長に補せられて同三十年九月には勅任技師として大阪土木出張所長を命ぜられ更に大阪築港工事長の委嘱を受けて大に大阪市の築港に努力してゐる更に明治四十一年には佛國巴里に於て萬國道路會議が開かるゝに當つて、氏は我國の代表者として同會議に列席するために、再び海外に赴きそのついでに歐米各國の土木事業の狀況を具に視察して翌四十二年一月に歸朝したのであつた、明治四十四年四月に初代技監の故古市公威氏の跡をついで、内務技監となつたが、その間大正四年五月には明治神宮造營局評議員を仰付られ、亦同六年七月には當時支那各地は未曾有の大水害に見舞はれたので、時の支那政府の委嘱に依つて内務技監の現職の儘で其の水害調査のため支那各地の被害地を視察して技術上の見地に基いて、復舊計畫を支那政府のために樹てたのであつた、翌大正七年

八月に至つて後進に途を開くために技監の職を原田貞介氏に譲つて茲で氏は永き官界生活をやめて其後民間の水會社の顧問等をしてゐたが、大正十年三月齡ひ六十八歳を以て没してゐる、正三位勳一等瑞寶章を賜つてゐる。

亦沖野氏は我國土木工學專家を網羅する土木學會の創立に際しては故古市博士と共にその創立委員の一人となつて大に力を致してゐる、又古市會長辭任のあとには氏は會長となつてゐる、この會の創立の際は丁度古市男と氏は還曆を迎へるので多年我國土木學界に盡瘁された兩博士の功績を永久に記念せんがために、中山、岡崎兩博士が主となり同志相謀つて資金を募集したが之が使途に付て古市男と氏は相談の上土木工學獎勵の趣旨に基いて全額を土木學會に寄附したのであつた。

斯様に沖野氏の生涯は全く我國に於ける土木界の先驅者として技術方面にのみ終始してゐるが、殊に大阪市の築港、大阪市の水道、淀川の改修工事などは氏が心血を

注いで完成した最も顯著なる工事の一つである。

緒て沖野氏の内務技監就任は明治四十四年四月で、やめたのは大正七年七月であるから、この間に内閣は六度程變つてゐる、氏の技監就任當時は第二次桂内閣であつたが、この内閣は間もなく瓦解して、第二次西園寺内閣となり次に亦第三次桂内閣となり、次いで山本、大隈、寺内、の順次に三代内閣と變つてゐる。氏は退官當時は寺内氏を首相とする所謂寺内内閣の時であつた。その間亦内務大臣も平田東助、原敬、大浦兼武、再び原敬、一木喜徳郎、後藤新平、水野鍊太郎諸氏等々と六人が代つてゐる。次官に於ては、床次竹二郎、押川則吉、水野鍊太郎、下岡忠治、久保田政周、再び水野鍊太郎、小橋一太等々と六氏が代り、土木局長は水野鍊太郎、久保田政周、下岡忠治、小橋一太、堀田貢等五人が代つてゐる、そこで水野氏は沖野氏が技監にならぬ以前からは勿論、技監就任當時の土木局長であり、その後ち次官大臣と共に内務省にゐたから、筆者は芝高輪の邸に水野氏を訪問して沖野氏に付ての感想を求めた

のであつた。温厚篤實なる氏は早速筆者を引見して。

沖野君と自分は共に内務省にゐたから、氏のことは多少共克く知つてゐるが、氏は實に我國の土木界の先驅者であり、亦權威者でもあつた、港灣に治水に道路に其他土木行政の技術的方面には非常に功績を残してゐる、氏とは一つ前の土木局長であり亦技監であつた故古市氏はこれ亦技術界の大先輩として、斯界の權威者でもあつたが、古市氏は土木局長遞信次官等々と行政方面に關係したが、沖野氏は全く古市氏とは性格が違つて、徹頭徹尾技術方面のみ終始した人であつた、私の氏に付いて感服したことは、「自分は技術に對しては一切の責任を負ひ且つ夫れ以外のことには一切口嘴を入れぬから、其の代りに事務系統の人々が濫りに技術に關してとやかく云ふことはやめて貰はなければ困ると云ふことであつた。全く最なことであると私は思ふたのであつた。

と水野氏は語られて、實に沖野氏といふ人は脇目もふらずに技術の眞面目を發揮したと稱讚された後に續いで。

氏は晩年年をとつても聊かも若い人達ちに負けずに却て若い人達を克く指導したのは、氏は非常に讀書家であつて常に書物を座右から離さず、餘暇さへあれば新刊の書籍雜誌等に目を通して新智識の獲得に勉むると共に研究に餘念がなかつた結果であると私は思ふてゐる。

沖野氏が技監をやめたのは、寺内内閣の時で私は丁度内務大臣の時であつたが、隅々氏は私にもう多分技術方面でも若手の立派な人々が出来てきてゐるから、私は後進に途を開くためにやめたいとの話しであつた、その時私は夫れはまあ夫れとしてもう少しやつてくれればと止めたが氏の信念は固いから私も遂に同意して氏はやめたのであつた、夫れで私は寺内首相に氏を貴族院に入れるやうに極力推薦したのであつたが人員の關係と四圍の事情等で實現が出来なかつた。

と水野氏は語り、次に言葉を次いで、元來行政系統の人々は克く上院にも入るが技術方面の人々にはもつと待遇をよくせんといかんことは私は常に左様考へてゐたと語られ

たあと更らに。

斯様の次第であつたから私は其後加藤友三郎内閣の時にも私は内相であり亦、古市氏が樞密顧問官であつたら遇ふて、もつと技術家を優遇せんといかんから私はこれに努力するつもりであるからと云つて古市氏にも骨を折つて貰らふやう依頼したことがあつた、そうして再び沖野氏の上院入りを加藤首相に推薦したが、當時或る事情の下にこれ亦實現が出来なかつたことは誠に遺憾であつた。

元來沖野といふ人は、その人格の上にては立派な人であつたが、亦學問にも造詣が深く、其當時幾多の若い技術者達は氏を敬慕してその指導と教へを受けたものである、氏は殊に物質上には頗る淡泊であつて、自分は獨りの子供もある譯けでもないからと、その受くる俸給を割いて若き學生等の學費に貢いでやつたり、帝國大學の工科大学にその研究費の一部にといつて寄附したりしてゐた、斯様の人であるから其人格は想像するに難くない

氏の擧げた功績は澤山あるが、大阪築港工事や淀川の改修等は殊に今日でも克く認められてゐるやうな次第である。云々。と

斯様に水野氏は語られたが、更に筆者は永らく氏の部下として共に仕事を爲した、道路改良會の評議員工學博士眞田秀吉氏を大森山王の博士邸に訪ふて、之れ亦沖野氏に付いて話を聞いたが眞田博士は。曰く、

明治三十一年頃沖野博士は内務省の大阪土木出張所長をしてゐたが、當時大阪市の築港に付いて政府の諒解を得て大阪市築港工事長をも兼ねてゐた、築港の方の事務所長は西村捨三といふ人であつたが、當時沖野氏は土木出張所長として年俸は確か三千圓築港工事長として三千圓都合六千圓をとつてゐた、然し自分は生活にこんな金はいらんとて其内から帝國大學に寄附されてゐた、築港工事も無事終了した際に、大阪市の市會の議決に依つて沖野氏の功勞に對して數萬圓を送ることとなり、氏に贈與しやうとしたが氏は自分にはそんな金はいらんと云

つてどうしても受取らないため大阪市も一段は議決したことでもあり、非常に夫れには困つて居つた、あとでそのことは、どうなつたかはつきりしたことは知らんが、何んでも遂に受取らなかつたやうに聞いてゐる、實に金には淡泊の人であつて常に俸給の中から、若い技術者達の研究費や學費等を助けて後進者に立派な技術員の出るやうにその指導と養成に勉められたものじや……。自分等も多大の指導と教へを受けたが現に森垣龜一郎博士等の如きもその薰陶と指導を受けたのであつた。

と眞田博士は先づ氏の人格等に付いて語つたあとで、筆者の問ひに對して。

沖野氏は趣味といつては別にこれといふ程のものもなかつたやうであるが、若い時には多少圍碁や將棋位やつたやうであつたそうであるが、これも後にはやらす亦玉突は先づ上手といふてよい方であつたが、これもやめて仕舞つた有様であつた。只だ酒も飲まないが食物は非常に健啖家で先づ喰ひ道樂といつた方であつた、大阪に居

る際でも土佐堀にゐたがどこにうまい食ふものがあるとか克く知つてゐた、夫れから煙草は煙草道楽といふ位克く吸うてゐたが、これは紙巻でなくて葉巻であつた、亦葉巻には非常に通じてゐて、例へば偶々人から貰らつてもどれでものむと云ふのではなく、何んでも氏の亡くなられたあとで奥さんがこないに人から煙草を貰らつたのを吸はないで置いてあるとて、人々に別け與へたのとことであつた、それでも氏は家にゐる時は煙管で刻み煙草を吸うてゐた。亦非常に讀書家で常に書物や新刊の雜誌等を手にしてゐないことはなかつたが、夫れと共に熱心なる研究と努力家であつた、亦仕事に熱心なことには當時若かつた吾々も非常に驚いたことは度々あつた位である、と。博士はかように話されて、更に言葉を次いで。

新しい鐵網コンクリートのことが始めて明治四十四年前後に英文で書いてある書物が出たので、氏は早速これを買つて「氏は佛蘭西語には造詣が深いが英語で書いてあるが」夫れでも讀んで後ち吾々に對して一寸見て置

けと云つて貰らつたことがある、このやうに氏は絶へず部下の指導にも若き學徒の指導にも常々心懸けて力を用ひ氣をくばつてゐたが、實際明治三十二年頃から同四十五年頃までに氏の部下から氏の指導に依つて工學博士が四五人出たやうな有様であつた、現に後ちに土木試験所長となつた物部博士、この人は非常に學者で大學の成績も優等であつたが沖野氏の時に内務省の技術部に入つた人であるが、この人等にも亦内務省土木局の第二技術課長になつた金森鐵太郎博士等々にも更に現場監督の技師達にも數學の研究を大にやれ、理科の勉強を大にやれと指導したものじや、重ねて云ふが沖野氏は實際部下の人々を赤心以て指導したものであつた、そうして氏は全くの技術者としてその學術と實際に脇き目を振らずに精進した人であつた、實に日本の技術界の先驅者先覺者と云ふ言葉は氏に全く當てはまるのである。

氏の技師から技監へと永い在任中爲した仕事——功績に付ては枚舉に暇がないが、なんと云ふても、大阪築港

工事は氏の残された大なる功績の一つである。横濱港の築港は英國人、パーマスが主となつて本邦人は皆な助手でやつたのだが、當時日本一の大築港事業である大阪築港は全く氏が主となつて全部本邦人の手であれだけの大事業をやり遂げたのである——あの淀川改修も氏の手で行はれたのであるが、これ迄人力運搬であつたのを機械力利用の土工運搬もその時が日本で始めてで、これも亦氏の計畫に依つたものである、明治四十三年にあの關東の大洪水に際して利根、荒川、渡良瀬の各川改修工事に付いても一から十迄沖野氏がこれに携はつて成功したのであつた。

と眞田博士と筆者との話は次から次へと轉じて行つたが筆者はこゝで沖野サンのあとは現在どうなつてゐられるのでしやうかと尋ねたら、氏は。

沖野氏には獨りの子供もなかつたから自然相續人も何もない……令兄は師範學校の先生であつて、その人に確か三四人の子供はあつたやうだが、其の獨りも跡と續ぎ

に貫はず廢家されるやうである、お奥サンは筆子と云つて女子高等師範學校の出身であるが、現在はおもう八十歳に近い年齢であるが、今尙非常に御健在で大阪市の外池田に居住されて老女を相手に愛國婦人會支部の愛國農園約五六百坪の經營監督等をされてゐる、沖野氏は豊岡藩の大磯といふところの出身である、奥サンは大阪の愛國婦人會支部に非常に功勞があつて、その創設者の一人であると云つて可なりである云々。と、言はれた。

かやうに眞田博士と筆者との話しは約二時間餘に互つて次から次へと話題は變つて行たが餘り永くなるのでこの位にして置く。

沖野氏が古市技監の後を承けて第二代の技監として明治四十四年四月就任大正七年七月まで滿七年と三月間に其の國家事業たると地方事業なるとを問わず土木上に於ける技師上の指揮監督に當つては頗る熱心に事に當られたが、在任中に於ける國家工事を數ふれば、その新に着手したものは荒川、北上川、阿賀野川等の各改修工事あり亦吉野川、

野州川、桂川、の各砂防工事と鹽釜、新潟の兩港修築工事があつた、又竣工したるものは木曾川下流と庄川の兩改修工事と神通川、桂川の砂防工事もある、更に敦賀港第一期修築工事もある、更に又當時計畫中に屬する主要なるものは多摩川、加古川、神通川等其他二三河川の改修工事があつた、然も大阪築港と淀川改修工事と大阪市の水道布設工事は氏の技監在任中ではなかつたが、氏の技術者としての生涯中最も重なる事業の一つであつたやうである、殊に大阪築港に於て然りと云ひ得るのである、さればこゝに大阪築港に於て其由來と氏との關係を見ると大阪築港研究會事歴一斑や大阪築港雜誌に依ると。

全體大阪築港問題と云ふことは、其の由來は久しいものである、これを記録に見ると、先づ貞享元年に彼の河村瑞軒の安治川開鑿は大阪河港の擴張工事であつたやうである、夫れに依ると池山新田から、順次元祿の市岡、寶曆の湊屋、明和の石田、文政の八幡、天保の天保山等の埋立又は埋立て人工と自然とが相互に競争しつゝ、河港

が海へへと前進したものである、王政維新は河港が海港となるべき革新期であつた、明治元年七月には大阪は開港となつたが、同二年後藤象次郎氏の知事兼治河使時代に既に築港計畫があつたが、この計畫は自然立消へになつて仕舞つて、其後蘭人ドールン技師の修築案からレークの第一次案へと歲月は進んでいつて、明治二十七年六月に至つて、漸く同氏の改正案が出来上つて築港調査委員の修正案となり、愈々起工式を擧げたのは明治三十年十月十七日の神嘗祭の日であつた。これが丁度沖野氏が三十年八月に大阪築港工事長になつてゐるからその就任後間もない時であつた。

明治三十九年刊行の大阪築港誌にこういふことを書いてある。

大阪築港事業は明治五年渡邊昇知事時代に一たび其の端緒を啓きしも時機未だ至らず、明治十三年建野郷三知事の時再び之を試みて成らず、明治二十五年山田信道知事の時三度其萌芽を出し漸次調査に着手し、明治三十年

内海忠勝知事に及んで初めて實地施行の域に進めり、此間知事を更ふること五代、年を闕する二十有五年、市民の之に處する不撓不屈終始一貫或は大坂築港研究會を起し或は大坂築港期成同盟會を設け、致々汲々當局者を援け今や始めて宿望を達し我邦無比の大事業を開始するに至れり、云々。

とある、實に大阪築港問題は二十有五年も計畫に耽けつてゐたのであつた、亦嘗て大阪市長であつた關一氏は、

大阪築港の事は明治初年に其の起源を發してゐる、維新の際政治經濟其他凡ゆる社會事業の變革は大阪市繁榮の根底を搖がせた、此の秋に方つて大阪三郷の昔を挽回するの策は港灣を完成し開港たるの實質を整ふるの外なしとして、港灣修築の議が期せずして叫ばれたのである、而して早く明治五年には具體化して有志者間に築港義社なるものが組織され免許を得た上、工費財源の一部に充當すべき寄附金の曠集に迄手を染めたのであるが、惜くも中折して實現に至らなかつた、爾來幾度か議せら

れ何回となく企てられたが機は熟しなかつた、併し市民の要望は已まざるのみか市町村制が發布されて市獨自の事業を營み得ることになつて以來益々其の熱度は加つたのである。

とその實現までの苦心を縷々述べて。

遂に時機は到來した。市民の計畫計算の下に設計さるべき大築港起工の日、明治三十年十月十七日、それは眞に大阪市更生の紀念日である、工事は千八百餘萬圓の豫算を以て八ヶ年間に竣功せしむる目論見であつた、現在でこそ此の程度の工費額は別に驚く程の數ではないが、當時大阪市の歳計は百萬圓足らずであつたのだから、恰も一ヶ年の歳計の約二十倍に相當する大工事を起した譯である、この一事を看ても假令國庫の補助はあつたと言へ市民が如何に大なる決心を以て此の事業に着手したかが窺はれるのである。

と斯様に言つてゐるが、亦大阪市港灣部長であつた横山徳太郎氏の大坂築港沿革誌に依ると。

大阪は古來交通の要衝に當り遠く豊臣氏居城を此地に相してより我國經濟界の中心となり徳川幕府を経て明治に入るに及び河海交通年と共に愈々頻繁にして、徳川時代の發鑿せる安治川及明治初年政府に於て築造したる川口波止場等を以てしては到底時代の推移に應ずべくもあらず、加ふるに港灣は遠く西方に展開して風波に曝露し河口は絶へず泥砂の埋没する所となり、浚渫意の如くならず、築港の議は夙に識者の間に唱導せらるゝに至り、大阪府は英人技師ブランドン又は蘭人土木技師ファン・ドールンをして計畫せしめ更に明治十三年政府は大阪府の稟請に基き雇工師蘭人ヨハネス、デレーケに囑して設計せしめるも財政上之を實行するに至らず挫折せり、然れども四圍の情勢其必要を感ずること愈々急を告げ、再びデレーケに囑し明治二十七年六月設計成り大阪市會並に調査委員會等を経て茲に設計確定するに至れり、之に要する工費豫算二千二百四十九萬四百圓にして財源は主として公債によるも政府より國庫補助として明治三十四

年度より向ふ十ヶ年間毎年四十六萬八千圓合計四百六十八萬圓を仰ぎ尙市内官有地八萬三千四百三十坪、時價百九十七萬八千圓の下付を受け三十年より八ヶ年間に竣功せしむることとなり銳意其工の進捗に努力せり。

とある、そうして沖野氏は森垣、岡の兩工學博士等を下として築港の技術方面に付いて築港工事長として明治二十三年頃大阪府知事であり後ち農商務次官になつてゐた西村捨三氏の築港事務所長と共に一身同體となつて獻身的努力をして、漸く大阪築港の事業は完成したのであつた。

凡そ港灣工事設計の當初に調査すべき事項は、その海底の深淺、風向、風力、潮位、潮流、海底地質等にあるやうである、大阪築港は計畫場所を中心として南は大和川、北は武庫川に達する海面に於て海心に向ひ八百間乃至三千間を數年間に亙つて施行して其の結果を見たるに深淺に於ては水深二十尺以上の海底にあつては殆んど變化を見なかつたが、水深二十尺未満の海底にあつては、概して深さを減じ殊に潮流の關係上各港口の南端には滯砂多きを發見したと

共に亦沿岸潮流多きを發見したのである、亦沿岸潮流は其の干満に關係せずして常に神戸方面から西宮、大阪、岸和田、の沿岸に沿ひて回流し又速度は區々として一定してゐないが平均一分時に十五六尺であるから敢て急速ではないが、實驗の結果土砂掃運の効は尠なからざることが明かとなつたのである、亦潮位は計畫當初に於ける八箇年間の調査に依ると潮望平均満潮は op (Osaka Peil) の略語にして明治七年中に於ける大阪港の最低水位を示すものである) 上五尺二寸同干潮は op 上五寸五分であつて、干満の差は四尺六寸五分である、最高水位は op 上六尺四寸最底水位は op 下一寸五分である、然るに十箇年の調査に於ては平均満潮は op 上六尺三寸同干潮は op 上一尺五寸であつて干満の差は四尺八寸であるが、之を基準としたやうであつた、海底の地質は概ね青色乃至青黒色の泥土から成つて居り、 op 下百尺以下でないに耐力微弱にして築造物の基礎として到底信頼することが出来ないので、此の點は沖野氏以下實地に當る技術者は非常に苦心したところであ

る。亦風向は北風が最も多いが速度に於ては、西風が最大であつて、西南風の最大速度は一秒時間三十五米四となり殊に大阪港は北は六甲箕面の連山に依つて、擁護せらるゝも西南は紀淡海峡に擴がるを以て一旦西南風の起ると波濤は高まり屢々航行の危険を醸すに至るのであるから、此等の點にも細大の注意を拂ふ必要があつたのである、斯様に周到なる設計調査の基に工事は着々として進められたが、此間幾度か計畫は變更を加へなければならぬ状態に立至つて、その都度工事長としての沖野氏は非常に苦心して研究もなし、努力もしたものである、かうして施工工事の概要は防波堤、港内浚渫、棧橋、及び、繫船岸、埋立、運河、船溜場、浮標、起重機設置、鑿道、土家及び倉庫等々であるが、これ等のことを書くに餘り永くなるから省略することにする。

兎も角もこの大阪築港といふ一大事業に對して沖野氏は大阪市の委囑に依つて工事長の重職を引受けて、全く献身的努力を以て全く其任務を果したことは何人もその努力と

功績とは認めてゐるところであるが、更に氏の生涯中に於ける三大事業の功績の一つである大阪市上水道に付いて見ると、大阪市は本部の中樞に位して、古來商業の中心地のみでなく、明治以降は各種大規模の工業勃興を來たして、將に當時は商工業の中心地たらんとしてゐるにも拘らず、市域は概ね淀川下流部の沖積層に屬して良水の湧出する所は極めて少ない状態である、故に從來から屢々悪疫が流行すると共に亦一方には消防の敷設が完備せなかつたために、屢々大火の災害を被つたことは再三でなかつた。茲に於て既に上水道布設の議はあつたが却々着手までには至らなかつたのである。

偶々明治十九年に市内一面に虎疫の大流行するに及んで、時の大阪府知事建野郷三氏は上水道布設を急務として神奈川縣主任工師英人パーマーを聘して上水道布設調査のことを委嘱したのであつた。同氏は翌二十五年五月に至つて諸般の設計を完了して、之れが報告書を提出したが、夫れに依ると工費は總額に於て二百五十萬圓を要することにな

つてゐた、然し當時の大阪市の財政は斯かる巨額の工費を投ずることが當底許されないもので、此の計畫も遂に實現することが出来なかつた。然るに明治二十三年再び虎疫の大流行を來たすに及んで府知事西村捨三氏も水道布設の急務を認めて從來の計畫に基いて工費二百五十萬圓を以て明治二十四年度から三ヶ年の繼續事業とし、その財源を國庫補助及び市公債に據ることとして、市會に提出したのであつた、そうして市會は直ちに可決したので西村知事は水道布設認可申請書並に國庫助金下付の稟請書を時の内務大臣西郷従道侯に提出したのであつた、茲に於て大阪市は府技師野尻武助氏を工事長とし、パーマー氏の調査報告を基礎として、更に内務省雇工師バルトン氏の意見をも徴して大阪府廳内に水道布設事務所を設置し、人口六十一萬人に給水する目標の基に一人一日の給水量を三立方尺としてその水源を淀川の左岸櫻の宮に選び、二個の取水塔に依つて河水を水源地に導き淨化を施したる後、唧筒力を以て大阪城内の貯水池に送り、夫れから自然流下に依つて市内に配水す

るの計畫であつた。其後間もなく野尻氏は逝去したので、大阪市は工事長の職を沖野氏に囑託したのであつた。同二十五年八月城内貯水池の土工に着手し爾來工事は順調に進行して同二十八年十月に至つて全部竣功したのであつた、此の工費は總額二百四十萬圓であつて内ち國庫補助額は七十五萬圓であつた、斯様の次第で大阪市の上水道工事は殆んど全部沖野氏の手によつて順序克く施工されて遂に完成したのであつた。

更に氏の功績で見逃すことの出来ないのは淀川の改良工事である、この淀川の改良工事なるものは明治二十九年第九回の帝國議會の協賛を経て、工費九百九萬四千圓を以て十箇年繼續事業として起工せられたる所謂高水防禦工事である、そうして其の目的とするところは琵琶湖の沿岸を始め其の流域たる山城、河内、及び攝津の大平野に於ける水災を防ぎ、併せて淀川沿岸の悪水停滯の害を除き下流部に於ては、大阪市内を洪水から遮斷するために別に新川を開鑿して市内水路を運河化し以て、河口の大阪港に土砂流出

の害を防止せんとするものであつて、施工區域は琵琶湖から大阪灣に至る間である、この計畫が即ち時の第四區土木監督署長であつた氏に依つて全部設計されて技術官會議の審査を経て其の確定を見るに至つたものである。

この工事は技術的には川敷の堀鑿、新堤の築造等に巨額の土工費を要し且一定の短期間に竣功せしむるの必要があつたので、到底人力を主とする従來の施工法に據ることは不可能なることを沖野氏は認めて、氏は英斷を以て内務省直轄工事に於て最初の試みとして、主に機械力を應用する掘鑿運搬の工法を採用すべきことを提議したのであつた、そうして技師工學博士岡胤信氏及び同川上新太郎氏を歐洲に派遣して、當時に於ては最新優秀なる土工諸機械を選定購入せしめたのであつたが、その中に掘鑿機は佛國ブルュー會社工場の製品を採用したのである、その製作に係る機械を得て淀川改修工事は著しくはかどつたことは勿論、これが爲めに我國の河川土工事業の進歩發達に寄與するところ多大であつたことは氏の功績として特筆するに充分であ

と思ふのである。

元來我國の土木事業殊に河川工事の概要を見ると明治維新前に於ては、沿川に幕府領藩領旗領等々とその境域を接して而も河川の状態は自然的以外に人爲的にも悪化せられて、年々夏秋の交に至れば必ず水害が伴ふの有様であつた、これは各自領土の保安のみに焦慮して河川の工事は概して自衛のみの目的に出で、敢て他を顧みなかつた狀況であるからであつた。然るに維新以後政府は一般國土の保安上重大なる利害關係を有する河川に對して統一せる治水策を樹立して之を直轄施行するの方針を執り明治五年に和蘭から長工師ファン・ドールン氏を始め多數の工師を招聘して六年始めて淀川の實測並に調査を行ひ爾來國家が改修工事を直轄施工することにしたのである、夫れで利根、信濃、木曾、北上、庄川、阿武隈、最上、阿賀野、富士、大井、天龍、吉野、筑後の諸川を直轄十四大川と稱してゐた、そうして殆んど外人の手に依つて改修計畫設計が擧げらるゝ有様であつたが、明治十三年頃から沖野氏を始め山田寅吉、

石黒五十二、田邊義三郎諸氏は海外留學から歸朝し、亦清水濟、岡胤信、小柴保人、日下部辨二郎、近藤仙太郎の諸氏等其他大學出身の多數技術者も續々内務省に奉職するに至つて、茲に本邦治水事業は外人技術者の手を離れて我國の技術者の手に依つて治水計畫は水害の防止と河身の改良と相俟ちて我國の實情に適せしむるを得たのであるかやうな次第であるから、この間沖野氏は該博なる識見と研究に依つて技術神聖感を以て故古市氏と共に種々の起工設計に亦その施工に當つて、萬遺算なきを期してこれが施工に當つたことは云ふ迄でもないのである。

斯様に沖野氏は古市氏と共に我國技術界の先驅者として我國の土木界に於ては大先輩たることは斯界の肯定するところであらう。

茲で筆者は我國の行政組織は餘りに法科萬能主義に墮してゐないかと思はれるのである。何も技術を主體とする所謂技術官廳にまで法科萬能主義を振り廻す必要はないと思ふのである。然るに現状は未だに法科萬能主義の區域を脱

せず技術者をその下位に置くは決して國家發達のために面白くない。殊に總力戰……高度國防國家の建設は何を置いても國家施設の最大急務たる現狀に遭遇して殊にこれを痛感するのである、筆者は強いて技術者のみを特に優遇せよとは云はないが、少くとも技術者出身でも法科出身者と同様に適材を適所に置きて以て大臣は勿論次官なり局長なり知事なり其他行政部の長官たるにすると同時に退職後に於ても勅選等に多く推薦して以て國家は技術人材を優遇し亦これを活用して用ゆべきであると思ふのである。

偕て筆者は最近某知名の士に面會して、いろ／＼對話中に某氏は筆者に對して「人の評を書くといふことは其の人が現存してゐても亦既に故人となつてゐても却々六ヶ敷いものである……とかく神様に仕上げる傾向があるがこれでは全くの人物評にはならんから……」と笑ひながら云はれたが、筆者も誠にこれには同感であつた故に沖野氏に付ても強いて神様に仕上げるつもりではないが、沖野氏はその人格に於ては稀れに見る高潔な人のやうである、殊に無欲

恬淡その受くる俸給までも割いて後進者を指導し教育したやうなことは一寸見れば何んでもないやうであるが中々到底常人の出來得ることではない。他から聞くところに依ると氏は餘り人とは深く交際せず云はば、ぶつきら棒の感があつたやうであるが、夫れは往々にして學者肌の人には多いうように思はれるが克く技術家や藝術家等に有がちの偏狹なる心の持主ではなかつたやうである。要するに氏は自己を克く認識して技術に専心最も忠實な人であつたと共に常に學問と研究を疎かにせなかつた所謂學究とこれを實地に應用する卓絶したる技術家である、技術方面には全然門外漢である筆者は技監とその仕事を評すると云ふことは聊か潜越であり亦自から顧みて滑稽とも思ふが……まあこれは讀者諸賢の見方に一任する外はない。と思ふてこゝに擱筆することにする。

×

×

×

×

×

×